

朝鮮後期門人録編纂の慣行と歴史研究への活用

—19 世紀嶺南南人柳致明の門人録を中心に—

金 知 恩
大 沼 巧 訳

1. はじめに

今日、歴史研究は研究の対象と範囲の拡大及び研究方法論の多様化を通じて、その時代の実相を究明し、これをもとに新たな歴史的意味を付与することに、焦点を合わせている。特に、歴史研究の空間的範囲が「中央」から「地方」へと拡大するにつれ、歴史的に一定の独自性と個性性を確保していた「地方」のアイデンティティーとその性格を明らかにするため、多くの努力を注いできた。

小白山脈の鳥嶺と竹嶺など、大きな嶺の南の地方という意味である「嶺南」は慶尚道の別称として高麗末から使用され、朝鮮後期から一つの歴史的用語として一般化された^[1]。16世紀以後、士林を中心に政界が再編されながら、朝鮮は性理学的理想が実現された国を目標とした。この過程で「鄭夢周—吉再—金叔滋—金宗直」に連結する性理学の正統が嶺南地域内で継承された点が注目され、嶺南は相対的に朝鮮時代士林派の根拠地という特殊性を持つようになった^[2]。

退溪李滉（1501～1570）と南冥曹植（1501～1572）の登場は、嶺南が持つ学問的位相を一層確固たるものにする契機になった。特に、士林の分化過程で退溪李滉を中心とした学派は「南人」と称される政治勢力を形成した。17世紀南人は、西人との政局主導権競争で大部分不利な位置におり、18世紀以後には結局政界から疎外され、在野に追いやられた。「嶺南南人」^[3]と呼ばれる彼らは郷村社会を運営する位置で同姓村落と婚姻を通じて家門の結集と紐帯を強化していった。さらに、退溪学の学問的深化と道統の確立を通じて自身のアイデンティティーを確固たるものとし、その勢力を組織化した。この過程で家門の運営と関連する数多くの古文書と学者たちの個人文集及び多様な著作が残され、今日朝鮮時代嶺南地域研究の貴重な資料として活用されている^[4]。

本報告では、その資料のなかで「門人録」が今日の朝鮮時代史研究にどのように活用され

うるのかを紹介しようと思う。安東を中心とした嶺南では退溪学脈を継承した名望ある学者が多く輩出され、彼らの学問的力量をもとに数多くの弟子を率いる学派を形成した。そして、後代にその後孫と弟子の主導で門人録が編纂されるのが一般的だった。ここでは、19世紀の嶺南南人柳致明の門人録を中心にその門人集団の実相と特徴を見ていくこととする。

II. 柳致明門人集団の形成と門人録の編纂

1. 柳致明の学問活動

柳致明（1777～1861、本貫：全州、字：定齋）は「李滉—金誠—張興孝—李玄逸—李栽—李象靖」へと続く退溪学脈の嫡伝を継承した19世紀嶺南南人を代表する学者である。1805年（純祖5）文科に及第したのち、官職活動をはじめ、1853年には官職が兵曹参判にまで至った。しかし、当時多くの嶺南南人がそうであったように、官職には大きな関心を持たず大部分が辞職を請うた。

柳致明は先賢の学問と理論を精密に検討し、学脈を通じて継承された退溪学を集大成し、これを後学に伝承するため、著述と講学活動に力を注いだ。彼は、1800年（24歳）に李滉の『朱子書節要』を要約・整理し、自身の初の著述である『朱節彙要』を完成させた。これは、自身の学問基盤が朱子学と退溪学にあることを明らかにしたものだといえる。

柳致明は1809年（33歳）、師の南漢朝が亡くなったのち、本格的に学問活動をはじめ、1811年（35歳）には、柳範休が主管する高山講会に参加し、李象靖の性道説を講じた。1824年（48歳）には、水谷里の鵝岐山に位置する黄山寺で門中の儒生とともに『中庸』を論じ、翌年には泗濱書院において『心経』で講会を設けた。この過程で自然と門中の子弟を中心に『大坪約案』がつくられるなど、門人集団が組織化し始めた。特に、1831年（55歳）後学養成のため、直接儒生を選抜し、高山書堂にとどめて教育し、その結果、門人の範囲は次第に拡大していった。彼は榮州の紹修書院と奉化の三溪書院でも講会を開き、石泉精舎にとどまって権斗経の『蒼雪斎集』を校正するなど、地域的に活動領域を拡げていった。この過程で、慶北北部の多くの門人が流入した。1840年（64歳）からは、2年間楚山都護府使として在職し、郷校で講会を主管するなど関西地域の学問振興のため努力した。

彼は、著述活動にも邁進した。まず、礼学を重視した家学の影響で、1830年（54歳）柳健休・柳徽文・柳鼎文とともに師匠柳長源が著した『常変通攷』を10年間の校正を経て刊行した。個人的には、「深衣諸説」・「程子冠制」（1833年、57歳）などを著し、自身の礼説を整理した『家礼輯解』（1836年、60歳）を完成させた。これとともに李玄逸の緬礼に参加したのち、その祭文をつくり（1832年、56歳）、『退溪集』重刊を主管した（1843年、67

表1 柳致明の学問的・政治的主要行蹟

年度	年齢	柳致明の行蹟
1805 (純祖 5)	29 歳	秋, 東堂試に及第する。
1811 (純祖 11)	35 歳	8 月, 柳範休が主管する高山講会に参加し, 李象靖の性道説を講ず。
1824 (純祖 24)	48 歳	10 月, 諸学者と黄山寺で『中庸』を講ず。
1825 (純祖 25)	49 歳	2 月, 泗濱書院の講会に参加し, 『心経』を講ず。
1830 (純祖 30)	54 歳	5 月, 柳健休・柳徽文・柳鼎文とともに師匠・柳長源が著した『常変通攷』を10年の校訂を経て刊行し跋文を記す。
1831 (純祖 31)	55 歳	1 月, 全羅右道掌試都事に任命。 10 月, 高山書堂で学生を選抜し, 寄宿させて教育する。
1832 (純祖 32)	56 歳	3 月, 李玄逸の緬礼に参加し, 祭文をつくる。 9 月, 紹修書院・三溪書院の講会に参加したのち, 石泉精舎にとどまり権斗経文集である『蒼雪斎集』を校訂す。
1834 (純祖 34)	58 歳	10 月, 校理・承政院同副承旨・経筵参賛官・司襄院副提調に任命。 12 月, 「礼疑叢話」・「読書瑣語」を著す。
1836 (憲宗 2)	60 歳	3 月, 『家礼輯解』完成。 9 月, 『養蒙正訓』を編輯。
1839 (憲宗 5)	63 歳	12 月, 楚山都護府使になる。
1840 (憲宗 6)	64 歳	2 月, 楚山に赴任する。 9 月, 「学記章句」纂輯, 郷校で講会を実施する。
1843 (憲宗 9)	67 歳	5 月, 鳳停寺に行き『退溪集』重刊を見る。
1844 (憲宗 10)	68 歳	6 月, 柳鼎文の『近思録集解増刪』校訂。
1845 (憲宗 11)	69 歳	『大山先生実記』(10 卷 5 冊)を完成し, 跋文を著す。
1846 (憲宗 12)	70 歳	9 月, 高山書堂で玉山講義を講じ, 郷飲酒礼を行う。
1847 (憲宗 13)	71 歳	6 月, 泗濱書院に集まり『鶴峯集』重刊を校訂し, 跋文を作る。
1848 (憲宗 14)	72 歳	2 月, 柳健休の『異学輯辨』を校訂する。
1853 (哲宗 4)	77 歳	6 月, 同知義禁府事, 漢城府左右尹になる。 9 月, 五衛都総府副総管に除授される。 10 月, 兵曹参判除授になり「三綱十目」を作成。
1854 (哲宗 5)	78 歳	11 月, 柳致儼の『湖学集成』を校訂し, 序文を記す。 「大山先生神道碑」を記す。
1855 (哲宗 6)	79 歳	3 月, 莊献世子を追崇し, 耐廟することを請う上疏をあげる。 5 月, 全羅道智島で流配生活をはじめ。12 月に釈放。 「読書説」, 「葛庵先生神道碑」を著す。
1857 (哲宗 8)	81 歳	5 月, 講学と後学養成のための晩愚亭が建てられる。
1858 (哲宗 9)	82 歳	7 月, 晩愚亭で柳長源が編纂した『四書纂註増補』校訂。
1859 (哲宗 10)	83 歳	6 月, 李源祚と晩愚亭で礼義について論辨する。枕澗亭で『中庸』の最初の章を講論す。
1860 (哲宗 11)	84 歳	6 月, 弟子とともに仁説を講論する。 7 月, 同知春秋館事に除授される。

年度	年齢	柳致明の行蹟
1861（哲宗 12）	85 歳	4 月，晩愚亭で弟子とともに講学を行う。 10 月 6 日，死去。

歳)。さらに，1845 年（69 歳）には『大山先生実記』を完成させ，その跋文をつくり，柳致明自ら李滉以後理想的に継承された退溪学脈を正當に継承していることを明らかにした。1846 年（70 歳）には高山書堂で「玉山講義」を講じ，郷飲酒礼を実施し，翌年には泗濱書院で『鶴峯集』重刊を校正し，跋文をつくるなど，活発な著述活動をつづけた。

これとともに，途切れることなく官職に任命され，嶺南内の政治的名望は高まり，1853 年（哲宗 4）には兵曹参判にまで除授された。特に，1855 年（哲宗 6）には，湖派を代表する位置で，莊献世子の追崇を請う上訴をあげ，これにより全羅道の智島に流配されることになった。これを契機に嶺南内での柳致明の位相は確固としたものになり，その門人集団の範囲は嶺南と関西地域だけでなく，全羅道地域にまで拡大した。彼は，80 歳の高齢になっても講学活動に対する情熱を失わず，門人金建銖の招聘により虎溪書院で講義を行った。一年後には，講学と後学養成のための空間として「晩愚亭」が建立され，1860 年（84 歳）にも弟子たちとともに朱熹の「仁説」を講論するなど，死ぬまで弟子のための教育に情熱を注いだ。

柳致明は，40 年を越える活発な学問活動を通じて学問的立地を固めていき，湖派を代表する位置で彼らの理論的根拠を定立していった。嶺南内の儒生は柳致明を通じて李象靖の学問的位相を確認し，さらには柳致明を李象靖に続く退溪学脈の正統を継承したものとして認識した。この過程で，柳致明を中心とする文人集団が形成及び拡大したのである。

2. 門人集団の形成

「門人」は師匠から教えを受けた弟子を指す。朝鮮時代の門人を表現するのには，門下・門下生・門生・教生・侍教生・侍生・侍下生・教下生・及門子など多様な用語が使用された。師弟関係は，直接的な出会いのみならず，間接的に学問的教えを受けた場合にも成立しうるものだった。また，公的關係ではなく，二人の間の認識からはじまる関係であるため，諸状況にしたがって変化しうる流動的關係である。後日門人間に師弟関係をめぐって是非が起こる素地がここにあった^[5]。

門人録は該当学者の門人を一定の基準と形式で整理しておいた資料である。門人録は一度の編纂で完結する場合もあったが，抜け落ちた門人が確認されたり，誤謬が発見されれば増補の過程を通じて門人を追加記載したり，削除した。そのため，門人録に収録された内容とその増補の過程を詳しく調べれば，その学者と門人集団に対する多くの情報を得ることがで

きる。李滉（1501～1570）の門人録である『陶山及門諸賢録』は、嶺南南人門人録を代表するものとして、以後編纂された門人録の大部分は『陶山及門諸賢録』の形式及び構成に従っている^[6]。

「定斎学派」と呼ばれる柳致明の門人集団は、彼に教えを受けた全州柳氏門中子弟を中心に結成された契の人名を収録した『大坪約案』の作成を契機に形成された^[7]。1827年1月21名の全州柳氏を収録した『大坪約案』は、それ以後数度追加がなされた^[8]。最終的に、327名の門人が収録され、字・生年・本貫・居住地などがともに記録されていた。

注目すべきことは、1845年追録を基準に1827年から1839年まで登録された門人68名のうち、全州柳氏の比率が85%（58名）で圧倒的だったが、1845年から1861年まで登録された259名のうち全州柳氏の比率は24%（62名）と急減したという事実だ。すなわち、この時期には、他姓または安東外の他の地域の多くの儒生が柳致明の門下に入門したということである。これは、血縁的關係を中心に形成された柳致明の門人集団が彼の学問的・政治的地位が高まるにつれ、その外延が拡大したことを示すものである。

『大坪約案』の門人が追録された年を表1の柳致明の行蹟と比較して調べると、その事実は一層明確になる。『大山先生実記』の完成（1845年、27名）、『鶴峯集』校訂（1847年、5名）、『異学集辨』校訂（1848年、12名）、兵曹参判任命（1853年、24名）、莊献世子追崇上疏による智島流配及び「葛庵先生神道碑」撰述（1855年、3名）、晩愚亭建立（1857年、81名）など、柳致明の学問的・政治的活動と門人集団の拡大は密接に関係していた。

3. 「及門諸子録」の資料的価値

門人録は編纂されて以後、数度の増補過程を経ることも多かった。柳致明の門人録もまた何種類か確認されている^[9]。柳致明の門人録と関連した既存研究で分析対象になった門人録は『坪上及門諸賢録（表題：坪門諸賢録）』と推定される。しかし、これより前の時期に作成された門人録が存在していた。それが、「及門諸子録」である。

「及門諸子録」は、柳致明が病床に伏してから臨終の瞬間まで100日余りの間、門人らの見舞記録と病勢、以後に挙行された一連の儀礼過程を記録した喪礼日記である『考終録』の最後の部分に載せられている門人録である^[10]。「及門諸子録」には、全部で423名の門人が収録されており、生年順に彼らの字・本貫・居住地・及第可否などがともに記録されている。「及門諸子録」の場合、『考終録』内の他の文とは異なり、作成者が明らかではなく、作成時期もやはり明確でない。

しかし、門人録のなかでもっとも早い時期に作成されたのは「及門諸子録」である。『考終録』に収録された「高宗日記」を作成した柳致淑（1823～1881）を通じてわかる。柳致淑

は、柳致明の族弟で、幼い時から柳致明のもとで学んだ人物である。特に、彼は『考終録』の編纂を主導し、後日名を治徳と改名した。この事実は、「及門諸子録」を除外したすべての門人録に記載されている。そのため、『考終録』のなかに収録された「及門諸子録」がほかの門人録より先立つものであることは明らかであるようである^[11]。すなわち、「及門諸子録」は柳致明の死後もっとも早い時期に作成された門人録として、当時彼らが普遍的に認識していた門人の範疇をもっとも実際に近いかたちでみせてくれる資料といえる。

「及門諸子録」に記載された423名の門人は、③『坪門諸賢録』（国学）に422名、②『及門録』に418名、④『坪門諸賢録』（安東）に417名、⑤「定斎門人録」に418名が重複して収録されている。すなわち、「及門諸子録」に収録された門人の大部分が、以後作成された門人録に含まれたのである。これは、彼らが柳致明門人としての確固とした存在感を持っていたことを確認させてくれるものであり、「及門諸子録」の資料的価値を示すものである。

より重要なことは、③『坪門諸賢録』（国学）で追加された門人の中で、関西地域の門人69名は、彼らが柳致明の門人であるという明らかな証拠もなく門人録に登録されたという事実である。実際に、69名の関西地域の門人は定斎宗家で保管していた「1852年清北儒生上書」と「1857年清北儒生上書」に収録された平安道儒生目録とその順序と人名が相当部分一致する（表2）。

2つの上訴は柳致明が楚山府使を歴任して行った善政に感服した地域儒生が巡察使と御史に柳致明を表彰することを請うた文書である。特に、「1857年清北儒生上書」に収録された儒生60名はすべて門人録に記載されており、上訴に記載された居住地別儒生目録の順序もまた門人録とほとんど同一である。すなわち、上訴に作成者として名を載せた関西地方儒生を③『坪門諸賢録』（国学）を増補していく過程でそのまま柳致明の門人として登録したのである。そのため、彼らが含まれた門人録を通じて柳致明の門人集団を分析することは、明らかな限界を帯びているといえる。

最後に、20世紀に作成された門人録のもつ特徴も考慮する必要がある。

18世紀まで朝鮮後期嶺南南人を代表する学者の門人録に収録された門人数は表3のようになる。しかし、19世紀学者の場合は、該当門人録に収録された門人の数が前よりも大幅に増加した。柳致明の「定斎門人録」には545名、許伝の『冷泉及門録』には514名、張福枢の『四末軒全書』の中の及門録には747名が収録されているのである。すなわち、門人集団の規模が以前に比して約200名以上増えたのである。

19世紀以後になると、身分制をはじめとした社会制度全般が瓦解し、学問を享有する者の数自体が以前に比して大幅に増加した。あわせて、1871年（高宗8）書院撤廃を契機に文集の刊行とその参与範囲は書院という制限された領域から両班層全般に拡散した。人的資源

表2 ③『坪門諸賢録』(国学)新規収録関西地域門人と「1852年清北儒生上書」と「1857年清北儒生上書」の儒生名簿比較

連番	姓名	居住地	「1852年 上書」	「1857年 上書」	連番	姓名	居住地	「1852年 上書」	「1857年 上書」
1	安教黙	碧潼	1	1	36	金奎煥	泰川	3	2
2	金臣玻	碧潼	2	2	37	韓仁倜	泰川	×	×
3	金翊龍	碧潼	5	3	38	金奎猷	泰川	2	×
4	姜益周	碧潼	6	4	39	李文賢	泰川	×	3
5	安教憲	碧潼	4	5	40	李繼悦	博川	1	1
6	安教熙	碧潼	3	×	41	宋處疇	博川	2	2
7	金基祖	楚山	2	1	42	徐仲輔	博川	3	3
8	崔斎華	楚山	1	×	43	金正鉉	寧辺	1	1
9	李基泰	楚山	3	2	44	蔡錫洛	寧辺	2	2
10	金燦国	楚山	4	3	45	尹樂堯	寧辺	3	3
11	金鸞柱	楚山	×	4	46	車錫圭	寧辺	×	4
12	金鳳薰	楚山	×	5	47	朴基讓	鉄山	1	1
13	姜興国	昌城	×	1	48	朴基壯	鉄山	2	2
14	康錫鳳	昌城	×	2	49	鄭尚行	鉄山	3	×
15	許典	昌城	2	3	50	鄭相珩	鉄山	×	3
16	尹聖泰	昌城	3	4	51	李昌会	定州	1	1
17	姜奎瑞	昌城	1	×	52	李昌幹	定州	2	2
18	李亨杓	朔州	1	1	53	安慶寿	定州	3	×
19	朴鳳一	朔州	2	2	54	金雲傑	定州	×	3
20	崔之憲	朔州	3	3	55	金達五	嘉山	1	1
21	朴薰	渭原	1	1	56	尹樂道	嘉山	2	2
22	宋儀鳳	渭原	2	2	57	安学敬	嘉山	3	3
23	宋龍微	渭原	×	3	58	尹承鎬	嘉山	×	×
24	桂国	江界	1	×	59	金樂洙	嘉山	×	4
25	金禧麟	江界	2	1	60	尹政敏	雲山	×	1
26	田興悦	江界	3	2	61	李士幹	雲山	×	2
27	金魯養	江界	4	3	62	白三鳳	雲山	×	3
28	張慶国	亀城	1	1	63	張孝日	義州	×	1
29	安権	亀城	2	2	64	洪徐楽	義州	×	2
30	金志喆	亀城	3	3	65	張孝乾	義州	×	3
31	朴基龍	宣川	1	1	66	白觀熙	龍川	×	1
32	田昌傑	宣川	2	2	67	安愚相	龍川	×	2
33	桂南楫	宣川	3	3	68	李再蓮	龍川	×	3
34	崔龍一	宣川	×	4	69	成舜汝	熙川	×	1
35	白樂元	泰川	1	1					

表3 退溪学派嶺南南人主要学者の門人現況^[12]

学者	生没年	門人録	門人 数
*退溪 李滉	1501～1570	『陶山及門諸賢録』	309 名
月川 趙穆	1524～1606	「月川先生門人録」	19 名
西厓 柳成龍	1542～1607	「西厓先生門賢録」	117 名
*鶴峰 金誠一	1538～1593	「鶴峯先生門人録」	40 名
寒岡 鄭述	1543～1620	「檜淵及門録」	342 名
旅軒 張顯光	1554～1637	『旅軒先生及門録』	355 名
愚伏 鄭經世	1563～1633	「愚伏門人録」	107 名
*敬堂 張興孝	1564～1633	「敬堂先生及門諸賢録」	221 名
*葛庵 李玄逸	1627～1704	「錦陽及門録」	341 名
*大山 李象靖	1711～1781	「高山及門録」	273 名

(*表示は柳致明が継承した学脈上に位置する学者である)

の増加と出版文化の普遍化は学派のアイデンティティーを確立し、門人を結集させるのに重要な要因となったのである。そうはいっても、200名以上の門人数増加は自然なこととはいえない。

門人録は該当学者が死亡したのち、その子孫と弟子の主導で刊行されるもので、19世紀の学者の門人録の大部分は、20世紀以後該当門中の主導で編纂された。収録された門人数の急激な増加には、祖先の学問的位相をもとに地域内の門中の権威を確保しようとする目的がある程度含まれていると考えられる。20世紀以後、該当学者の学脈とその学問的水準はもはや個人と家門の位相を定立する決定的要素にならなかった。一方、よりわかりやすく明確な「門人数」という量的指標は、その学者と家門の学問的位相を証明する重要な要素になった。関西地域の儒生をたいした検証もなく柳致明の門人に一括登録し、学派の規模を拡大させたこともまた20世紀以後門人録編纂にあらわれた流れと関係していた。

そのため、柳致明門人録のなかでもっとも早い時期に作成された「及門諸子録」が門人集団の実際の様相と規模を把握することのできる資料としての価値を帯びていると考えられる。そのため、門人集団に対する分析もやはり「及門諸子録」を通じてなされなければならないのである。

III. 「及門諸子録」を通じた柳致明門人集団の分析

1. 門人集団の姓貫別構成

門人録に収録された423名のうち、全州柳氏は19.4%に該当する82名で最も多くの数を占めていた(表4)。これは、家学の伝承を重視してきた全州柳氏家門の特徴をそのままみせてくれるものとして柳致明門人もやはり門中子弟を中心に形成され、彼らが学脈継承の中

表4 「及門諸子録」内の姓貫別門人分布

連番	門人数 (名)	姓貫別	姓貫数 (個)	%
1	82	全州 柳氏	1	19.4
2	54	義城 金氏	1	12.8
3	27	安東 権氏	1	6.4
4	13	真城 李氏, 韓山 李氏	2	各 3.1
5	12	英陽 南氏	1	2.8
6	7	固城 李氏, 烏川 鄭氏	2	各 1.7
7	6	寧海 申氏, 達城 徐氏, 永川 李氏	3	各 1.4
8	5	密陽 朴氏, 潘南 朴氏, 全州 崔氏, 漢陽 趙氏	4	各 1.2
9	4	光山 金氏, 光州 李氏, 丹陽 禹氏, 商山 金氏, 載寧 李氏, 晋州 姜氏, 昌寧 成氏, 耽津 安氏, 平山 申氏, 陝川 李氏	10	各 0.9
10	3	高敞 呉氏, 南平 文氏, 大興 白氏, 務安 朴氏, 昌寧 曹氏, 咸安 趙氏	6	各 0.7
11	2	慶州 李氏, 光山 李氏, 光州 盧氏, 金海 金氏, 金海 裴氏, 金海 許氏, 東萊 鄭氏, 驪江 李氏, 醴泉 権氏, 利川 徐氏, 文化 柳氏, 密陽 孫氏, 碧珍 李氏, 上洛 金氏, 宣城 金氏, 水原 金氏, 鵝洲 申氏, 安東 金氏, 冶城 宋氏, 玉山 張氏, 晋州 柳氏, 清道 金氏, 坡平 尹氏, 河陽 許氏, 咸陽 朴氏, 花山 李氏	26	各 0.5
12	1	江陵 崔氏, 康津 安氏, 開城 金氏, 慶州 朴氏, 高靈 金氏, 曲江 裴氏, 広州 安氏, 龜山 朴氏, 徳山 尹氏, 礪山 宋氏, 靈山 辛氏, 醴泉 林氏, 奉化 琴氏, 缶林 洪氏, 尚州 周氏, 宣城 李氏, 星州 呂氏, 星州 李氏, 星州 裴氏, 順天 朴氏, 順興 安氏, 安東 張氏, 延安 李氏, 完山 李氏, 月城 李氏, 月城 朴氏, 宜寧 南氏, 仁同 張氏, 長水 黄氏, 長興 林氏, 全州 金氏, 全州 李氏, 晋州 鄭氏, 昌原 黄氏, 青松 沈氏, 清安 李氏, 清州 鄭氏, 清州 韓氏, 青海 孟氏, 咸陽 呉氏, 玄風 郭氏	41	各 0.2
13	19	確認不可		4.5
合計	423		98	100

枢的役割を担っていた、特に、柳致明の子・娘婿・孫を含む親族と、内姪・内弟を含む外族からなる門人が53名に達し、血縁関係が柳致明の門人構成に重要な基盤だったことがわかる(表5)。

続いて義城金氏(54名, 12.8%), 安東権氏(27名, 6.4%), 真城李氏・韓山李氏(各13名, 各3.1%), 英陽南氏(12名, 2.8%)などの順で、全部で98個の姓貫が門人を構成していた。全州柳氏家門は金誠一家門である義城金氏との婚姻を契機に16世紀中ごろ、安東に入郷して以後、同姓村を形成し、これをもとに学問的・経済的立地を固めていった。18世紀には「小退溪」と称され、退溪学を集大成した李象靖(韓山李氏)家門との婚姻で全州柳氏の学問的位相は一層確固たるものとなった。これを通じて柳致明門人の多数を占める姓貫の場合、全州柳氏家門の婚姻と学脈の影響がそのまま反映されたことがわかる。

表5 「及門諸子録」内の柳致明一家

連番	関係	姓名（門人録 連番）	名数
1	子	柳止鎬（258）	1
2	婿	金在九（45），金精寿（67），金達録（148）	3
3	孫	柳淵博（410）	1
4	従弟	柳致説（7），柳致正（76），柳致璋（142）	3
5	従叔	柳蘊文（3）	1
6	従姪	柳応鎬（350），柳慶鎬（400）	2
7	再従弟	柳致冕（51），柳致伝（130），柳致修（244）	3
8	三従弟	柳致孝（15），柳致潤（46）	2
9	族叔	柳聖文（2），柳遠文（12），柳沢文（16），柳珩文（69），柳徵文（217），柳潤文（236）	6
10	族弟	柳致博（9），柳致祿（17），柳致皞（22），柳致誠（56），柳致楨（78），柳致璿（225），柳致相（228），柳基洛（229），柳致格（231），柳基厚（285）	10
11	族姪	柳鼎鎮（50），柳星鎮（64），柳宅欽（77），柳養欽（93），柳冕鎮（110），柳巖鎮（131），柳天欽（188）	7
12	族孫	柳道永（83），柳泰永（122），柳根永（238），柳纘永（383），柳淵愨（423）	5
13	族曾孫	柳箕植（339），柳元植（346）	2
14	甥姪	李晩徳（89）	1
15	従甥	金 鏞（150）	1
16	内弟	李秀愨（116）	1
17	内姪	李明稷（91），李文稷（99），李敦嵩（196）	3
18	婦姪	申榮（13）	1
合計			53

2. 門人集団の居住地別分布

門人集団の居住地別分布を調べると、嶺南地域居住者が394名で全体門人の93.1%を占めるほどに圧倒的である。嶺南内では、安東が172名（43.7%）でほぼ過半をしめ、奉化26名（6.6%），永川15名（3.8%），寧海・礼安各14名（各3.6%），榮州・義城・青松各11名（各2.8%）などの順を示している。さらに、安東内172名の中では臨東に87名（50.6%，全州柳氏），金鵝（義城金氏）・蘇湖（韓山李氏）に各各13名（各7.5%），臨河11名（6.3%，義城金氏）など安東東南部地域だけで124名（72%）が居住していた。

19世紀安東の嶺南南人間には「屏虎是非」と呼ばれる退溪学脈の道統定立及び郷村運営の主導権競争と関連した熾烈な葛藤が展開した。その結果、安東地域内退溪学派は分裂し、その対立は一層激化していった。李象靖を虎溪書院に追享するのに対し、強力な反対を表明した柳成龍系列の屏派は主に家学として学脈を伝授し、安東の西側である豊山柳氏世居地で

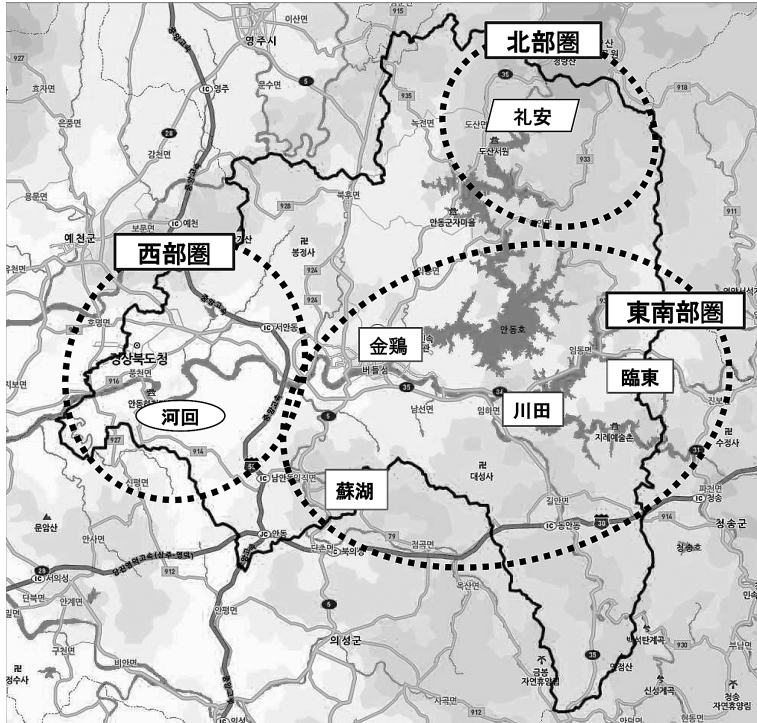


図1 19世紀安東地域退溪学派の分裂・対立様相

ある「河回」を中心に圏域を形成した^[13]。

一方、李象靖を虎溪書院に追享することで金誠一以後「張興孝—李玄逸—李栽—李象靖」へと続く学脈を退溪学の道統として確立しようとした虎派は、義城金氏世居地である「川田」，「金鷄」などと韓山李氏の世居地である「蘇湖」，そして全州柳氏世居地だった「臨東」を中心とした安東東南部側に圏域を形成した。そして，退溪李滉の後孫として安東北側には両論を持ち合う位置にいた真城李氏が中心となりまた一つの圏域をなしていた。彼らは，退溪学を家学として伝承し，陶山書院を中心に礼安に世居していた（図1）。

柳致明門人の居住地別分布様相は，19世紀安東の虎派の圏域をそのまま反映していた。そのうえ，柳致明の門人のなかで河回を中心とした西部圏と礼安上溪を中心とした北部圏に居住する門人は一人もなく，屏虎是非による当時の安東儒林の先鋭な分裂様相を証明してくれている。

嶺南地域外には，柳致明の楚山都護府使活動（1840年2月～1842年1月）による影響で関西地方居住門人が16名（楚山14名，清北1名，咸興1名），全羅右道掌試都事活動（1831年）と全羅道智島での流配生活（1855年）の影響で全羅道居住門人4名が含まれている。

注目すべきことは，門人の居住地が安東圏だけでなく，洛東江上流から下流まで慶州圏，

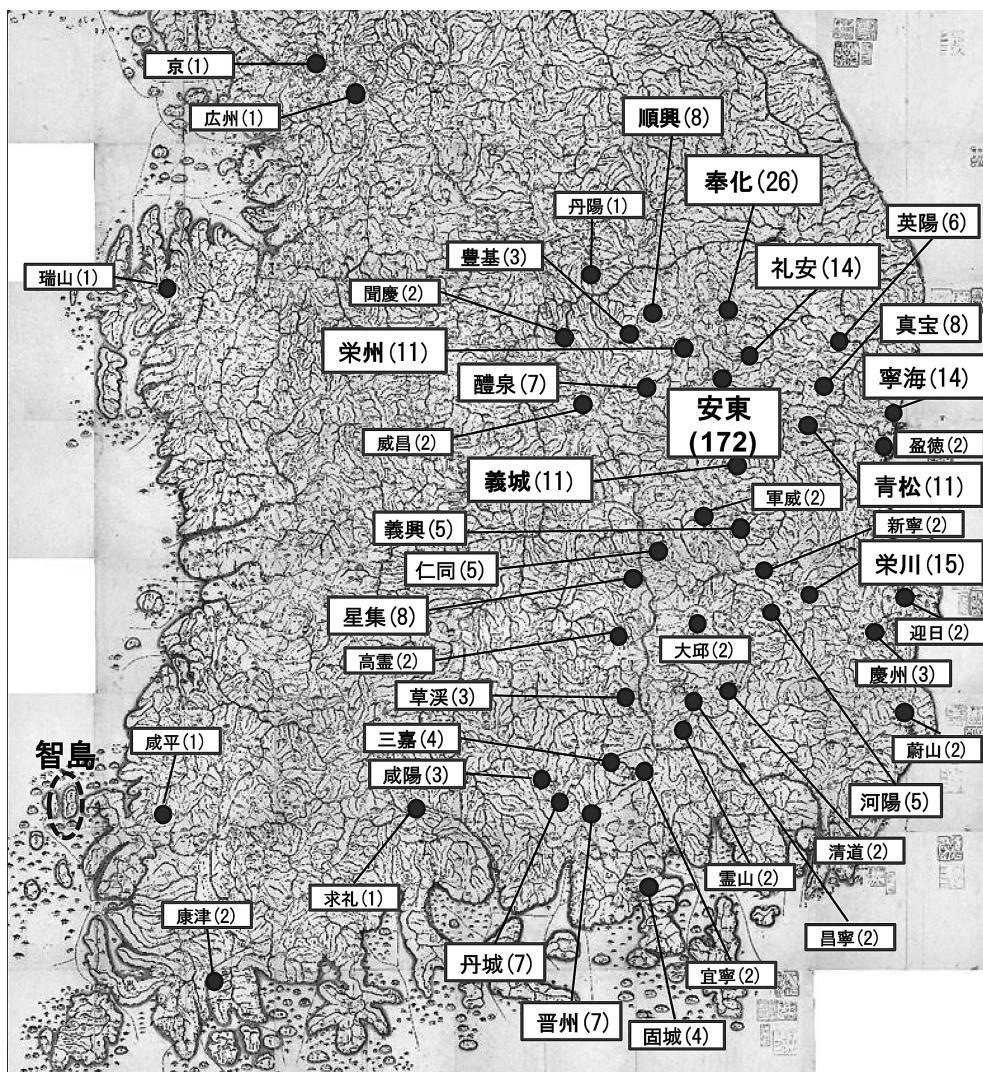


図2 柳致明門人の居住地別分布^[14]

晋州圏など、屏派系列の尚州圏を除外しては、嶺南地域全体に満遍なく分布していたという点である（図2）。これは、19世紀嶺南内の柳致明の学問的位相とその影響が安東を中心とした慶北北部を越え、嶺南全域に及んでいたことを推察させてくれている。

3. 生員・進士及び出仕門人の構成

柳致明門人のなかで、小科・大科・蔭官・薦挙などで官職に進んだ門人は全部で 55 名であり、全体の門人の 13% に該当する。柳致明は 1805 年（純祖 5）29 歳の歳で文科に及第し、翌年承文院副正字に任命されて以後間歇的に官職に出て、1853 年（哲宗 4）には、その官職が兵曹参判に至った。彼は、官僉に志を持たず、学者としての人生に邁進したが、文科及第

表6 「及門諸子録」内文科及第者名簿

連番	姓名	本貫	字	号	居住	生没年	出仕 経路	官職	備 考	門人録 ^[15]
1	金禹銖	義城	乃錫	鶴浦	奉化 海底	1804～1874	文科		金聲久後孫, 金熙紹孫	38
2	曹克承	昌寧	景休	亀厓	新寧 龜溪	1803～1877	文科	工曹参議		43
3	李敦禹	韓山	始能	肯庵	安東 蘇湖	1807～1884	文科	吏曹参判	李象靖後孫, 1831年柳致明の 高山書堂・教育活動時選抜, 1855年柳致明智島流配時同行, 柳致明葬礼(1861)に3ヵ月 白布巾・白布帯, 『定斎集』刊 行主管	62
4	柳致好	全州	季好		安東 朴谷	1808～?	文科	参議	柳致孝弟, 1855年智島流配時, 柳致明に会いに行く	75
5	権泳夏	安東	聖游	退逸軒	奉化 西谷	1810～?	文科	兵曹参判	権撥後孫, 権載大子, 1855年 智島流配時, 柳致明に会いに 行く	84
6	李晩徳	真城	日休		礼安 下溪	1809～?	文科	正言	李滉後孫, 李泰淳孫, 柳致明 甥姪	89
7	李晩運	真城	文五	双翠	礼安 溪南	1815～?	文科	吏曹参判	李滉後孫, 李彦淳孫	156
8	権好淵	安東	希顔	二山	奉化 西谷	1824～1865	文科	持平	権撥後孫	210
9	柳章鎬	全州	伯憲		安東 臨東	1823～1870	文科	仮注書	柳致淵子	234
10	金麟燮	商山	聖夫	端溪	丹城 丹溪	1827～1903	文科	司諫院 正言		283
11	権玉淵	安東	景德		奉化 西谷	1839～?	文科	正言	権撥後孫	401

と官職の除授は柳致明の社会的位相を一層確固たるものとした。

彼の門人中で小科に及第した者は33名(生員試20名, 進士試13名)で7.8%, 大科(文科)に及第した者は11名で全体門人の2.6%である。彼らは, 科挙を通じた自身の立地をもとに師匠の意を継ぎ, 門人らと安東内の儒林を率いていく求心点の役割を果たした。科挙外の学問と徳行を基盤に蔭官・薦挙を通じて出仕する場合は, 11名(蔭官:6名, 薦挙:5名)であり, 彼らもまた門人集団内で主軸勢力として活動し, 師匠の学問を継承していった。

柳致明門人を代表する弟子に数えられる人物には李敦禹(1807～1884, 文科, 吏曹参判), 金道和(1825～1912, 薦挙, 義禁府都事), 金興洛(1827～1899, 薦挙, 右副承旨), 権世淵(1836～1899, 生員, 崇陵参奉)らがいる。李敦禹は文科に及第したあと, 高宗に国家的危

機を克服する方法を記した上疏をあげ、批答を受けた人物だった。金興洛は、金誠一の後孫で柳致明に続く退溪学脈を継承・定立した 19 世紀末嶺南儒林を代表する学者として評価されている。金道和と権世淵は、義兵将に推戴され、安東義兵を率いていった人物である。彼らみな、自身の学問と徳行をもとに出仕した門人として、以後定齋学派の主軸勢力として活動した。

出仕した門人らの存在とその活動は 19 世紀嶺南儒林内の柳致明門人集団の学問的位相と立地を証明してくれるものだった。また、400 名余に至る定齋学派が門人の量的成長と学問的・質的成長をともになしていたことを示してくれるものでもある。

IV. 結語

柳致明は、退溪学脈を継承した 19 世紀嶺南南人を代表する学者である。彼は、著述と講学活動を通じて、学問的立地を固め、文科及第後官職の除授と政治活動は嶺南内での彼の位相を一層確固たるものとしたのであった。その結果、多くの儒生が彼に教えを受け、門人集団を形成した。「定齋学派」と称される柳致明の門人集団は全州柳氏門中子弟が『大坪約案』を作成していくなかで組織された。以後、柳致明の学問的・政治的位相が拡大していくにつれ、門人集団の外延もまた拡張した。

400 名余に達する彼の門人集団は、血縁的關係（全州柳氏）を基盤として婚姻・学脈と密接に結びついて拡大した。門人の大部分は安東東・南部圏に分布しており、19 世紀屏虎是非による安東の学脈的・地理的分裂様相をそのまま示していた。さらに、屏派の圏域を除外した嶺南地域全体に門人が満遍なく分布しており、19 世紀嶺南地域内の柳致明の位相と影響力を推し量ることができる。門人のなかで出仕した門人は 55 名に達した。彼らは、自身の学問的・社会的立場を土台として師匠の教えを継承し、門人及び安東内儒林を率いていく主軸勢力になった。以後、定齋学派は 19 世紀末、外勢の侵略を克服するために努力し、義兵運動を率いていく中枢的役割を担い、民族独立運動でも大きな活躍をし、師匠の教えを実践していった。

柳致明の門人録を通じて、我々は 19 世紀定齋学派の構成及びその特徴、そして柳致明とその弟子の学問的影響力を調べることができた。また、安東を中心とした学派間の深刻な分裂様相と 20 世紀以後発刊された門人録の特徴などを確認することができた。

朝鮮後期安東を中心とした嶺南では、退溪学脈を継承した学者が多く輩出された。彼らは数多くの弟子を率いて学派を形成し、各学派は学問的利害関係と郷村社会内の立地をもとに発展もしくは断絶した。門人集団に対する研究は学派形成の過程及び展開様相、学問的影響

力などを把握することのできる重要な作業である。この過程で該当学者の門人を一定の基準と形式で整理し収録した門人録の分析は門人集団研究の出発点といえる。さらに、増補された門人録間の比較研究により後代門人集団の利害関係及び葛藤様相などを把握することのできる多くの端緒を得ることができた。この点が、まさに朝鮮後期嶺南南人研究で門人録が持つ歴史的資料としての価値といえる。

注

- [1] 李樹健『嶺南学派の形成と展開』、一潮閣、1995年。
- [2] 李秉休『朝鮮前期士林派の現実認識と対応』、一潮閣、1999年。
- [3] 退溪学派は南人と命名され、南人のなかで嶺南地方の南人は「嶺南南人（嶺南）」と、嶺南地方を出た畿湖地方の南人は「近畿南人（京南）」と呼ばれた（李樹健、『嶺南学派の形成と展開』、一潮閣、1995年、405-406頁）。
- [4] 「地方史」の観点での嶺南地域は、政治的・思想的に中央政界に対抗する位置から朝鮮後期両班郷村社会の典型的な様子を残した重要なところとして評価されている。嶺南地域を対象とした歴史学界の数多くの研究成果は、嶺南地域がもつ歴史的価値を証明してくれるものである。また、嶺南を重点的に研究する大学研究機関及び学会が組織され、関係学術誌及び単行本が発刊されている（慶北大学校 嶺南文化研究院；嶺南大学校 民族文化研究所；釜山大学校 韓国文化研究所；慶尚大学校 慶南文化研究所；大邱史学会『大邱史学』；釜慶歴史研究所『地域と歴史』など）。特に、滅失の危機に直面した儒教関連記録文化財を寄託され、安全で科学的に保存するための目的で2001年慶尚北道安東に「韓国国学振興院」が設立された。ここでは、国学資料の受託、国学資料の調査及び整理、国学研究資料の発刊及び補給、伝統文化体験教育及び研修などを推進し、嶺南を代表する研究機関としてよみがえった（www.koreastudy.or.kr）。
- [5] 禹仁秀「四末軒張福枢の門人録と門人集団分析」、『語文論叢』47、2007年、76-82頁。
- [6] 李野淳（1755～1831）ら李滉の後孫が、19世紀中頃、陶山書院で門人309名の情報を収録した『陶山及門諸賢録』を編纂した。門人の生年順で収録し、各人物ごとに字号・本貫・居住地・生没・事蹟などを記録した。
- [7] 『大坪約案』、韓国国学振興院所蔵、成冊0001。
- [8] 1827年（21名）、1830年（18名）、1831年（16名）、1832年（11名）、1839年（2名）、1845年（27名）、1847年（5名）、1848年（12名）、1849年（4名）、1850年（9名）、1851年（6名）、1852年（22名）、1853年（24名）、1855年（3名）、1856年（47名）、1857年（81名）、1861年以後（19名）。
- [9] ①「及門諸子録」（423名 収録、『考終録』内、韓国国学振興院所蔵、1冊、1861年）；②『及門録』乾、坤（韓国国学振興院所蔵、2冊）；③『坪上及門諸賢録（表題：坪門諸賢録）』（韓国国学振興院所蔵、1冊）；④『坪上及門諸賢録（表題：坪門諸賢録）』乾、坤（540名 収録、安東大学校図書館所蔵、2冊）；⑤「定齋門人録」（545名 収録、『全州柳氏 水谷派之 文献叢刊』12巻内、安東水柳文献刊行会、1989年）。
- [10] 『考終録』は柳致明が、1861年7月20日病床に入り、10月6日息を引き取った後、葬礼をおこなう過程を記録した柳致淑の「考終日記」、弟子の間で柳致明の服制をめぐる起こった論争を記録した柳致儼の「記師門成服時事」、葬地の選定とその手続きを記録した柳延鎬の「葬事時日記」、発訶を前後して特に争点になった事項を記録した尹最植の「会葬録」などで構成されている（金美栄「朝鮮後期喪礼の微視的研究——定齋柳致明の喪礼日記『考終録』を中心に——」、

- 『実践民俗学研究』12, 2008年, 239-240頁）。
- [11] 「及門諸子録」に柳致淑は230番目に収録されており、字・生年・姻戚関係・文集の存在だけ記されている。
- [12] この表は、金鶴洙「朝鮮中期寒岡学派の登場と展開——門人録を中心に——」, 『韓国学論集』40, 2010年, 113頁の表を再構成したものである。
- [13] 屏派系列は、尚州もまた主な拠点として確保していた。柳成龍が尚州牧使として在職していたころ、鄭経世を弟子として育て、続いて第3子である柳袵が尚州に移し、居住するようになって、尚州地域では鄭氏と柳氏を中心とした西厓の学脈が継承された（禹仁秀『朝鮮後期嶺南南人研究』, 景仁文化社, 2015年, 22頁）。
- [14] ソウル大学校奎章閣韓国学研究所蔵, 「大東輿地図」(<http://e-kyujanggak.snu.ac.kr/>)。関西地方（楚山, 北青, 咸興）の門人分布と嶺南内門人1名居住地別分布は表記を省略した。
- [15] ここで「門人録」は, 「及門諸子録」をいい, 該当の数字は「及門諸子録」の連番を表記したものである。

参考文献

- 「及門諸子録」, 『考終録』内, 韓国国学振興院所蔵, 1冊, 1861年。
- 『及門録』乾, 坤, 韓国国学振興院所蔵, 2冊。
- 『大坪約案』, 韓国国学振興院所蔵, 成冊0001。
- 「定齋門人録」, 『全州柳氏水谷派之文献叢刊』12巻内, 安東水柳文献刊行会, 1989年。
- 『坪上及門諸賢録（表題：坪門諸賢録）』, 韓国国学振興院所蔵, 1冊。
- 『坪上及門諸賢録（表題：坪門諸賢録）』乾, 坤, 安東大学校図書館蔵, 2冊。
- 禹仁秀『朝鮮後期嶺南南人研究』, 景仁文化社, 2015年。
- 李樹健『嶺南学派の形成と展開』, 一潮閣, 1995年。
- 李秉休『朝鮮前期士林派の現実認識と対応』, 一潮閣, 1999年。
- 金鶴洙「朝鮮中期寒岡学派の登場と展開——門人録を中心に——」, 『韓国学論集』40, 2010年。
- 金美栄「朝鮮後期喪礼の微視的研究——定齋柳致明の喪礼日記『考終録』を中心に——」, 『実践民俗学研究』12, 2008年。
- 禹仁秀「四未軒張福枢の門人録と門人集団分析」, 『語文論叢』47, 2007年。

（キム ジウン 慶北大学校師範大学歴史教育科助教）
（おおぬま たくみ 東京大学大学院博士課程）